2018 年 11 月の園だより

学校法人ピアソン学園　北見幼稚園
Tel. & Fax.　23-5353
幼稚園のホームページ：http://www.kitami-kindergarten.ed.jp/
幼稚園のメールアドレス：kitamiyouchien@car.ocn.ne.jp

今 月 の 聖 句

わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。

ヨハネによる福音書 15 章 1 節

＜聖書に聞く＞

今年も全園児がぶどう狩りに行きました。例年よりは生育がよくないと言われていましたが、緑のぶどうも紫のも、とても美味しいぶどうでした。十字ヶ丘ぶどう園は、その名も示す通り、先々代がクリスチャンで、丘の上に祈りを捧げる集会場があり、そこは修行の場だったとも聞いています。ぶどうは、聖書のいろいろなところに出てきます。旧約聖書では、預言者エゼキエルが、「ぶどうの木から、何か役に立つものを作るための木材がとれるだろうか。」と言っています。ぶどうは、木材としては全く価値がありません。また、預言者イザヤは、ぶどうの実に注目して、肥沃な土地をよく耕し、良いぶどうを植え、おいしいぶどうが実るのを待ったのに、実ったのは酸っぱいぶどうだったと語り、「私がぶどう畑のためになすべきことで　何か、しなかったことがまだあるというのか。」と神様の言葉を語ります。これらの例では、ぶどうはイスラエルの民が神様への信仰を捨てて他の神々を礼拝したり、あるいは自分の力を頼みとするような間違った歩みをしたこと裁く言葉となっています。しかし、今月の聖句は、イエスさまご自身が「私はまことのぶどうの木」と言われています。神様との関係が破れてしまったイスラエルの民に代わって、新しいぶどう園がここから始まるのです。イエス様は、材木としては価値のないぶどうを、ご自分と重ねます。その生涯を通して、利用価値のないものとして人々から捨てられる道、十字架の道を歩まれたのです。このイエス様が、復活されたと聖書は証言します。神様が農夫として良い世話をしている「まことのぶどうの木」は、木自身の中に神様の命を持つ木なのです。このぶどうの木に繋がる時に初めて、私たちは良い実を結ぶ生き方へと変えられていくのです。北見に十字ヶ丘ぶどう園があることの意味を噛み締めたいと思います。

＜月主題＞　「遊びこむ」

＜月のねらい＞

年少；・クリスマスの意味を知り、楽しみに待つ。
　　・友だちとアイデアを出し合ったり、イメージを共有しながら遊びこむようになる。
年中；・自然物に触れる中で、五感を通して秋から冬への季節を感じる。
　　・クリスマスの意味を知り、楽しみに待つ。
年長；・自然物に触れる中で、五感を通して秋から冬への季節を感じる。
　　・クリスマスの意味を知り、聖誕劇で自分の演じる役を頑張ろうとする。

＜11 月の子どもたち＞

広葉樹がすっかり葉を落とした園庭で、子ども達は冷たい風を浴びながら、積もった落ち葉を両手いっぱいに放り上げて遊んだり、最後の泥団子作りや鬼ごっこをして遊びます。下旬には雪がちらついたり、水たまりが凍ったりと、冬が近づいて来ていることに気づきます。年少・年中組は来年の春のためにチューリップの球根を植えたりします。各クラスで、色々なテーマに基づいてプロジェクト活動が進められ、体験が積み重ねられ深められていきます。クリスマスの準備も始まります。クリスマスはイエス様のお誕生日だというお話を聞く子ども達。年長は、聖誕劇の練習を始め、年少中組は讃美歌や歌の練習を始めます。自然物を使ってクリスマスの飾りを作ったりもします。「神様ありがとう」の感謝の心で、どの子も喜んでクリスマスを迎えるための準備を始めます。下旬には、聖誕劇の衣装をつけて集合写真の前撮りをします。少しずつクリスマスを待つ気持ちが高まっていきます。

＜絵本の楽しみ＞『はろるどと むらさきの くれよん』作：C・ジョンソン、訳：岸田衿子

「あるばん、はろるどは ふっと つきよの さんぽが したくなった」いつもの紫色のクレヨンを持って、出かけるはろるど。月夜の散歩なのに月が出ていない。早速、月を描く。散歩する道も描く。森に行こうとしたけれど、木がたくさんあったら迷子になるかもしれないと木を１本だけ描く。その木の下には大きなドラゴン。クレヨンを持つはろるどの手が震えて、波線になって、そこは海に。はろるどの想像がどんどん膨らんで、それが絵になって、お話もどんどん進んで行きます。丘を描いて上まで登ったら、自分の部屋が見えるかもしれないと山のてっぺんまで登った時足を滑らせてまっさかさま。落ちていく途中には何も描かれていません。でも大丈夫。「はろるどは あたまも いいし くれよんも もって いる。」自分をこう言える自己肯定感がいいですね。絵を描くことに大きな心のブレーキがかかってしまう私には、鼻歌まじりに描いているのかなあ、魅力的なはろるどです。

＜こころの空＞

『遊ぶヴィゴツキー』(L・ホルツマン)というここ数年気になっている本がある。そこに、「私は、幼い子どもが言葉を獲得しようとしているとき、これを世界に関する知識獲得のための媒介手段をマスターするプロセスとは見ない。発達のための環境と発達そのものを同時に創造していると理解する。幼児が、自分たちが誰であるか(being）と同時に、どのような人になろうとしているか(becoming)に、同時に関わる仕方を見ているのであり、これこそが発達のプロセスなのである。幼児は養育者とともに、発達環境を創造する。その環境が、自分以上の事を成すことを支え、今ある自分でありながら、自分がなりつつあるものへとなることができるのだ。」とても難解でしかも何度もそこに戻っていく考え方がある。“being”と“becoming”は、何も子どもの発達だけではない。先週、“子どものあーと見隊”のお母さん方が何度も集まって準備をして開かれた『光のあーと』。たくさんの方に楽しんでいただき大成功だったが、その準備の中で、去年と同じものではなく、自分たちがこれは子どもたちが喜ぶかもしれないというものを工夫して作っていったそのワクワクしたプロセスは、今ある自分と、これからなろうとしている自分を同時に体験しつつ、新しい展開へと切り開いていくことと、つながっていたのではないか。